愛知教育大学教育創造開発機構紀要　vol. 4　pp. 115 ～ 122, March, 2014

コンスタンツの虹学校における特別支援教育

船尾　日出志

社会科教育講座

Unterricht auf sonderpädagogischer Grundlage in der Regenbogen-Schule Konstanz

Hideshi FUNAO

Department of Social Studies, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

Keywords：特別支援教育，知的障害児童・生徒，良い学校
Sonderpädagogik, geistigbehinderte Schüler, eine gute Schule

Ⅰ　はじめに

2013年3月21日，セントレア発フランクフルト経由でフライブルクのヒマーライヒホテル（知的障害者を従業員に雇用しているホテル）に到着（一泊），翌22日にフライブルク教育大学でそこでの新しい教育実習プログラムについて学んだあと，スイスのクロイツリンゲンに移動し，ラインハルト・ヘッセ教授の自宅に宿泊。そして23日にドイツに再入国しコンスタンツの「特別支援学校」であるレーゲンボーデンシューレ（虹学校）を訪問した。手配をしてくださったのはヘッセ教授である。あいにく復活祭の休暇中であったので子どもたちに会うことができなかった。しかし校長のヴォルフガング・ブリュックナー先生が，校内を丁寧に案内してくだり，わたしの質問に親切に答えてくださった。以下は，その際の記録をまとめたものである。時間の関係で，口頭では質疑応答できなかった内容は，文書により解答していただいた部分もあるが，ここでは対談風の「研究ノート」として発表させていただく。対談部分は敬体で叙述する。

附属特別支援学校の校長を経験させていただくことがなければ，この種の研究に関心をもつことはなかった。

Ⅱ　ブリュックナー校長との対話

船尾：レーゲンボーゲンシューレの概要を教えてください。

ブリュックナー校長：レーゲンボーゲンシューレは特別支援教育学の原理にもとづいて教育をする学校で

す。知的障害児童・生徒のための部門と身体障害児童・生徒のための部門があります。前者は知的障害者のための学校用教育プランに従っています。12の学年で定員はおよそ30名です。実際の在籍数も30名です。12の学年は今のところ，3学年ごとに下級段階，中級段階，上級段階および作業段階に分けられています。後者は基礎学校／促進学校用教育プランに従うコース（5学年で定員はおよそ10名）と知的障害者のための学校用教育プランに従うコース（12学年で定員はおよそ30名）です。後者は実際の在籍者数は20名です。それ以外に，2006／2007年度よりレーゲンボーゲンシューレはコンスタンツのゲプハルト学校に分校を有しています。そこでは統合的な訓練形態が適用されています（現時点では7学年，将来的には9学年でおよそ25名の定員を予定）。

レーゲンボーゲンシューレの学級ごとの子どもの数は5–8名です。

教職員は，知的障害のための専門教師（社会教育者としての資格も有する），身体障害のための専門教師（身体療法および作業療法のための資格も有する），さまざまな専門領域の特別学校教師および技術系の教師で構成されています。それ以外に看護師，教育補助者，学校医，実習生，社会奉仕役務者（兵役代替）がいます。

船尾：通学範囲や通学の仕方はどうですか。

校長：基礎学校あるいは促進学校の教育プランに従って教育される児童・生徒についてはコンスタツ郡全体が通学可能範囲です。知的障害者のための教育プランに従う児童・生徒についてはコンスタンツ，アレンスバッハ，ライヘナウおよびラドルフツェル（ケルンシュタットおよびマルケルフィンゲン）から通学可能です。たいていの児童・生徒はマルテス支援サービスのミニバスで通学しています。わたしたちは児童・生徒が公共交通機関を自立して利用できることを目指しています。

舩尾：授業料は？

校長：授業料は無償です。ミニバス，つまりスクールバスの利用については負担が求められます。それ以外に両親は昼食代を支払います。

舩尾：1日のおおよその日程と昼食について教えてください。

校長:8時45分に授業開始です。終了時間は15時ちょうど（月曜，火曜，木曜）と正午（水曜，金曜）の2種です。月曜と火曜と木曜には学校で温かい昼食を食べます。

舩尾：学校の基本的教育理念を教えてください。

校長：レーゲンボーゲンシューレの基本方針は次の7つの言葉で表現できます。

① 人間像：「違うことが普通です」，障害の度合いや人生の見通しがどうであろうと，あらゆる人間は，その今の在り方において尊敬され，そして大切にされたいという要求を持っています。わたしたちはこの根本的信念が，ドイツの憲法である基本法の第1条「人間の尊厳は不可侵である」によって励まされていると思っています。

② 社会的統合：わたしたちは社会的な孤立傾向に抗し，そして児童・生徒の社会的活動能力を強化しなければなりません。それゆえ授業には，公的・文化的生活への参加が属しています。

③ 家庭と学校：親と教師は異なる使命を持っています。しかし共通の目標もあります。それは児童・生徒の肯定的な発達です。その目標を達成する土台は信頼に満ちた，仲間的な交流です。

④ 個別促進：わたしたちの学校では児童・生徒の学習の前提と学習可能性は非常に異なっています。学校は，どの子どもにもその子の能力に相応に個別的に促進するという課題を有しています。

⑤ 自主性：児童・生徒の可能な最大の自主性と自己活動の教育は至上の学習目標であり，そしてすべての教授領域を包括しています。そのことが成功するのは，家庭と学校が協力し，そして互いに支えあう場合だけです。

⑥ 協同とチーム：「自分のクラス」というようなモットーで，わたしたちは働きません。というのは，わたしたちの学校では特別支援教育の専門家，テラピーの専門家および医学の専門家が児童・生徒の全体的促進の意味において緊密に協力しているからです。クラス担任は同僚たちによってチームのなかで支援されているのです。

⑦ 今日の特別支援教育的促進：特別支援学校外でもまた，今日，特別支援教育的促進が行われています。通常学校との協同，校外学級および通学の統合的形態はわたしたちの自己理解の成分です。すべての関係者や関係機関との協力のなかでのそれらの形態の意味豊かな発展を，わたしたちは目指しています。

舩尾：失礼な表現になるかもしれませんが，お許しください。その素晴らしい理念は実際に実現されているのでしょうか。どのように評価なさっているのでしょうか。

校長：とりわけ1960年代以降に西ドイツにおいて影響力をもった教育者，ハルトムート･フォン･ヘンティッヒは「思想が偉大であるならば，歩みは小さくてもよい」と述べています。確かにわたしたちは「偉大な思想」を基本的教育理念のなかで述べています。しかし，わたしたちはそのような高邁な要求に常に応じているというわけではありません。とはいえ基本的教育理念は方向を叙述しています。その方向に，わたしたちは小さく，そしてときには大きく歩みを進めるのです。私たちの目標は日々の教育活動のなかで具体化され，そして経験できるものになります。

学校の質は確かに特に次の7つの分野で示されます。

① 教授と学習
② 学級と学校
③ 学校外との関係
④ 学校のマネジメント
⑤ 専門性と人格発達
⑥ 発達重点
⑦ 学校評価

今日は7つの領域におけるわたしたちの活動を個々に述べたいと思います。しかし，わたしたちはそれらの領域が網の目のように緊密に結びついているということを意識しています。

一方では，しっかりとした学校プログラムを嬉しく思っております。他方では発達重点ならびに評価（自己の活動の常時的検証）についての活動は決して終わりがありません。わたしたちの学校への要求は変化し，それゆえ学校プログラムは決して閉じられたものではありません。

舩尾：それでは7つの領域について説明していただけますか。

校長：あなたが特に関心をお持ちなのはどの領域ですか。

船尾：自分が校長であったならマネジメントや学校評価です。でも今はむしろ教授と学習に関する領域に興味があります。
校長：分かりました。まず教授と学習についてお話ししましょう。

レーゲンボーゲンシューレの特質は協働学習，つまり非常に独特な個人的学習可能性と類似した欲求を有し，さらに出来ない苦手がある児童・生徒たちの出会いにあります。そこでは児童･生徒はまったく自明の，通常の協働を経験します。

そこでは児童・生徒にいたわりの空間が提供されます。その際，児童・生徒は自己の障害と付きあうなかで，自己肯定感と自信を発達させることができます。児童・生徒はそのようにして自己のアイデンティティ発見において支援され，そしてその社会的行為能力において強化されるのです。

孤立傾向に対抗するために，わたしたちは児童・生徒と一緒に社会生活や文化生活に参加します。それゆえ授業は繰り返し現実の学習場所で行われます。例えばお金を使い，そしてお金を計算することも買い物のなかで学ぶのです。文化生活に属しているのは劇場，コンサート，映画，博物館への訪問，ならびに学校祭，作品展覧会等のような自主的な催しの構成です。

多様な授業構造と授業方法は，児童・生徒の個人的支援欲求に叶うために必要です。例えばわたしたちにとって特に重要であるのは，重度重複障害児童・生徒が，可能かつ意味豊かであるのならば，わたしたちの学校の一般的学級に統合されることです。ただし，個人的支援が人員不足ゆえに保証されない局面もまた存在しえます。もうひとつの重点は学校日常におけるテラピーと授業のかみ合わせです。

虹学校の校長先生

例えば行為定位的・プロジェクト定位的授業ならびに生活実践学習のようなさまざまな教授形態と学習形態は，わたしたちの活動の重要成分です。

すべての授業領域と休憩時間のなかで身体運動ができるようにすることも，同じく重要な基本原則です。運動は肯定的な身体感にとっての，良き空間的定位にとっての，数学的・論理的事態の理解にとっての，そしてそれらとともにわたしたちの児童・生徒の全体的発達にとっての基礎です。

さらにわたしたちは特別な価値を授業のなかでの自然経験においています。というのは，自然経験はすべての感覚領域における多様な，貴重な学習可能性を提供するからです。

それはわたしたちの学校にとって特別な課題領域です。私たちの学校の子どもたちは通常，同年齢の子どもたちと一緒に授業に参加します。しかし少なからずの重度障害の子どもたちは個人的支援欲求をもっているゆえに，そのような子どもたちには特別な学級のなかでより適切に対応することができるのです。わたしたちは，その学級が学校生活に統合され，そして適当な授業のなかでは他の学級と協同するように尽力しています。重度障害の子どもたちを最適に支援する適切な方法を，わたしたちは常に新たに考えています。

自立の教育は，わたしたちの理解では，かかわりあいの教育を含んでいます。社会的コンピテンツと自立は互いに分かちがたく結合しているのです。わたしたちにとって特に重要であるのは，児童・生徒が人格として受け入れられること，そしてそれぞれの年齢に相応の会話や交際を経験することです。授業で提供するものもまた年齢に相応に選択されるべきなのです。

「自由活動」や「現場学習」というような形式の授業は自己決定の実行や自己責任の強化を可能とします。

毎週のグループ活動，年間行事としてのプロジェクト週と林間学舎は自主性の支援におおいに貢献します。

わたしたちは重要な課題を，子どもと一緒に，子どもが相当に独立できる方法をみつけることであると思っています。そのことは，例えば運動あるいはコミュニケーションの領域におけるさまざまな制約を補償するための適切な補助手段の供給をもまた含んでいます。

学校内外での児童・生徒の行為能力を拡大するために，さまざまな言語的・非言語的コミュニケーション可能性を支援することは重要な目標です。そのことは個々人に向けられた言語支援の枠内でも，ならびに言語を助け，そして場合によっては代わりをする（表情やジェスチャー，絵や記号，電子的補助具）援助手段やレーゲンボーゲンシューレにおける言語支援は，しかし言語障害治療措置の代わりにはなりえません。

可能な最大の自立を達成するために，方法や目標について両親との協調が無条件に必要です。

両親との定期的な接触は，両親の夕べ，校内あるいは家庭訪問での個別懇談の形で，電話によって，そしてさまざまな学校行事にておこなわれます。

児童・生徒の人格を全体的に理解するという意味において，生活空間としての家庭もまた学校と関連しています。

ヤコブ・ムートの言葉を借りて申しましょう。

「理想主義というそしりを受ける危険を覚悟しつつ，学校は子どもたちが幸せであると感じる場所でなければならないと思う。」《ヤコブ・ムート（Jakob Muth, 1927年6月30日 – 1993年6月24日）の言葉。かれは，ドイツの教育学 研究者で，大学教授，障害児を通常の学校教育の枠組みの中に取り込んで教育支援 するために尽力したこと（統合教育，特別支援教育）で知られている。》

船尾：残念ながら，今日は復活祭休暇中ですので子どもたちに会うことはできませんが，こうして学校を案内していただいて，とても雰囲気の良い学校だと思いました。

校長：ありがとうございます。学校が生活空間であろうとするならば，学校生活は相応の可能性を含んでい

1年のサイクルが直観的に

なければなりません。学校次元では，そのことは例えば毎週の朝の会と帰りの会によっておこなわれます。児童・生徒も協力して作り上げるさまざまな行事や祭典は協同的学校生活のクライマックスです。そのようにして1年のサイクルが児童・生徒にとって経験可能となり，そして（学校）文化がわたしたちの社会的共同体のなかで生き生きとしたものとなるのです。音楽と歌唱はその際，重要な役割を果たします。協力は学級においても育てられます。

学級生活の構成において児童・生徒は社会的コンピテンツを発達させます。例えば学級での朝の会における対話のなかで，そして学級における皆で一緒の食事のなかで。

病気，悩み，そして死というような限界状況にかかわる経験もまた，わたしたちの学校生活の一部です。教育的責任から，わたしたちはそのテーマについてさまざまな疑問や不安をもっている児童・生徒を放っておくことはしません。ある子どもが亡くなった際には，感情移入しつつ，品位を保ってお別れをするために児童・生徒たちと一緒に適切な儀式を構成します。

校長：ところで，船尾さんが校長をされた学校でもさまざまな機関や組織と連携されていたと思いますが。

船尾：地域の教育委員会，市役所，精神科医を含む数人の校医，就職を支援する公的機関であるハローワーク，そして地域の諸学校園等と連携していました。防

丁寧に説明してくださった。

災訓練では市役所の職員や消防署，防犯訓練では警察から支援を得ていました。逆に地域の幼稚園，保育所における特別支援教育の助言のために，教員を派遣することもありました。

校長：そうですか。レーゲンボーゲンシューレの教員も相談活動，見守り活動によって他の諸学校，とりわけ通常学校における特別支援教育に積極的に援助しています。

さらにレーゲンボーゲンシューレは2006年9月以降，コンスタンツのゲプハルト学校のなかに分校を経営しています。そこには学年ごとに1学級があります。その学級では健常の児童・生徒と障害をもつ児童・生徒が一緒に教えられています（統合的学校発展プロジェクトのクラス［ISEP-Klassen］）。基礎学校の教員と特別支援学校の教員が協力して，児童・生徒の学習可能性と促進欲求に応じて，授業を構成します。2006／2007の学校年度では，それ以前はISEPの児童･生徒であった身体ないし知的障害の児童・生徒がレーゲンボーゲンシューレの児童・生徒として指導されています。それにより児童・生徒へ提供される特別支援教育も教科教育も明確に改善されています。

レーゲンボーゲンシューレの教員は週当たりおよそ30時間の担当コマ数の枠内で，統合的学校幼稚園「箱船」で働きます。そのために，コンスタンツの社会教育センターにある早期教育所，相談所，および他の学校幼稚園との緊密な協働や交流があります。それによって就学移行が容易になります。

船尾：今は，就学のお話が出たのですが，就労の方はいかがでしょうか。

校長：仕事段階（Werkstufe）が学校と労働世界をつなぐ場所，および青年から成人への移行を形成しています。その任務は，児童・生徒に成人生活のさまざまな社交形式，労働の形態，および余暇の過ごし方の手ほどきをすることです。そのために，とりわけ公的関係諸機関，知的障害者のためのさまざまな作業所や寄宿舎付き施設との継続的な連携が必要です。一般就労に向けての実習や就職のため

就業訓練としての現場実習

には，さまざまな企業や施設と協力することが重要です。

船尾：児童・生徒が場合によって，転校することはありますか。

校長：もちろんあります。必要に応じて，児童・生徒が他の種類の学校に転校できるように，わたしたちは居住地近くの学校と良好な接触をとっています。授業観察や体験登校については問題なく受け入れていただいております。

また児童福祉司，医者，病院，テラピーやリハビリのための住み込み型作業所とも密接に連携しています。特別な問題がある場合には，他の特別支援教育の諸機関と相談することがあります。

教員養成やテラピスト養成のなかで，わたしたちは教育大学，州立教員養成所，ならびにボーデンゼー湖のライヘナウ島にある作業療法士養成学校と協力します。

船尾：日々の教育を高い質で営み続けるには，相当な資金が必要だと思います。もちろん州政府からの資金提供はあるでしょうけど，それ以外に援助を得られているのでしょうか。

校長：後援会が学校を支え，そしてさまざまな活動にさいして資金提供してくれます。例えば，林間学校，遠足，祝祭（たとえば春の朝食会），博物館／劇場／映画館の訪問，私たちの学校の教師やテラピストの研修，社会奉仕活動等で。

そのような催しを積極的に支援したいと思っていただける方は，後援会のメンバーになることができます。寄付も歓迎しています。

船尾：わたしも校長時代，よく良い学校とはどんな学校か，それはどのようにして実現されるのか，と考えることがありました。

校長：レーゲンボーゲンシューレでは，教師が自分のアイデアや個人的な創意で学校の構成に協力することを支援され，そして称揚されます。そのようにしてこそ，良い学校が実現されうるからです。管理職と一般職員は研修への参加を相互に要求し，そして促しあいます。そのようにして自分の授業と学校のいっそうの発展のためのヒントをえて，そして実行するためにです。わたしたちはレーゲンボーゲンシューレのすべての協力者に，新たな発展や特別なプロジェクト（統合，校外学級，プロジェクト週，新しい授業方法）に関してさまざまな提案をするように期待しています。

同僚のなかでの建設的な共同活動には，創意性と集団性のバランスを常に新たに追求する構えが属しています。その緊張領域のなかでは，不可避的にさまざまな葛藤があります。それらの葛藤と建設的に付きあうことは，わたしたちにとって非常に重要です。そのことは例えば，管理職による司会のもとですべての当事者による解決に向かう，可能な限り適時な話し合いによって行われると思います。

学校運営の重要な課題は，信頼でき，そしてやる気が鼓舞される雰囲気を作り，そして促進することにあります。そのような雰囲気は協同的・同僚的指導スタイルにおいて示されます。あらゆる同僚は一方では，学校にたいし責任を引き受ける可能性を有し，しかし他方ではそのことを求められもします。その目標の実行のために，一般教員から運営委員会が形成されます。運営委員会は管理職による学校運営を，いかなる組織的・教育的問題において支援します。

全体教員会議は協働のための重要なフォーラムの場です。そこではさまざまな決議がなされ，そして学校の日々の出来事が明らかになります。さまざまな未処理の決定には当該の教員あるいは全同僚が参加します。協同的・同僚的指導スタイルには情報の適切な取り扱いおよび適時の伝達も関係します。

管理職のもうひとつの課題は，ときどきの学級チーム会議への参加です。チームのメンバーの相談に乗り，そして支援するためにです。結果としてチームを強くすることができます。

管理職と一般職員の間の協同の新しい形として協力者対話があります。その対話の特徴は，率直で，信頼に満ちた，そして相互の意見交換です。それは特別なきっかけがなくても毎年おこなわれ，そして評価されることはなく，目標の合意によって終了します。

船尾：お話をお聞きしていて，ドイツ社会の成熟した民主主義がレーゲンボーゲンシューレにおいても実現されているような気がします。ところで一口に職員といっても，さまざまな職種の方がいらっしゃるとお聞きしていますが。

校長：そうです。すでに述べましたように，レーゲンボーゲンシューレでは，一つ屋根の下にさまざまな職種の人が働いています。管理職チーム以外に，特別学校教師，知的障害のための専門教師，身体障害のための専門教師（身体療法士および作業療法士），および技術系の教師，社会教育者，看護師，介護士，奉仕労務者，実習生，上級公務員研修生試補がいます。さまざまな職種や養成，多様な個性，性格および素質は，わたしたちの学校が虹のように多彩であることの前提です。

班別活動の所属メンバー表

船尾：共同活動の具体的な様子を教えていただけますか。

校長：知的障害部門と身体障害部門があります。両部門は緊密に協力します。児

童・生徒は一つの学校に属していることを体験しています。知的障害の児童・生徒と身体障害の児童・生徒は合同の朝の会と帰りの会に，また休憩時間や昼食時間に出会います。授業のなかでも協同はあります。たとえば水泳や音楽の時間です。

プロジェクト週や班別活動も部門を超越しています。どの児童･生徒も，参加するプロジェクトあるいは班を自分で決めます。その場合，児童・生徒は年齢・学年を越えて活動します。

子どもたちの包括的全体的発達促進は，すべての教育の専門家とテラピーの専門家のプロフェッショナルな協働を前提としています。

どの学級にも担任がいます。担任の使命は，自己の計画や授業活動とならんで，学級で活動するチームの仕事をコーディネートすることです。担任は必ず常に一人の実習生，あるいは奉仕労務者，あるいは介護士の支援をえています。それ以外に，しばしばさらに2人目の教員，すなわち専門教師かテラピストが学級のなかで活動しています(二人制)。したがって個別化された授業（たとえば学級の分割）が可能です。

目標をしっかり定め，そして意味のある授業を保証するために，学級のチームのなかで，たとえば授業計画，授業内容の選択と配列，個々の子どもにおけるテラピー目標，両親との活動および教材教具の用意について合意がなされねばなりません。定期的に，個々の子どもについて教育相談が開催されます。

2週間に1度のペースですべての同僚が全体職員会議のために，あるいは学級チーム（トーキング･チーム）のなかで集います。そのようなさまざまな共同の形によって，わたしたちは自らに高度な要求が設定されていると意識するのです。

舩尾：そのような会議は，当然，教育研究のためのものでしょうか。

校長：その通りです。4週間ないし6週間に1度のペースで全体職員会議が行われます。それはしばしば教育的テーマで行われます。議長と書記は交代制です。議題は文書で提出されます。願いがあったり，貢献したりしたいすべての職員によって議題は付け足されます。

たとえば会議のテーマは次のようなものです。校内研修，たとえば自主性の発達というような教育問題，参加した校外での研修に関する報告，予算配分，新しい法規についての情報伝達，学校組織上の問題に関する決定，校内の様子

内容的に1つのテーマに集中的に取り組めるよう，すべての同僚が参加する作業グループが編成されます。たとえば次のようなテーマについて。

話せない児童・生徒のためのコミュニケーション促進，学校における環境保全，ホームページの制作，お祭りの準備，重度重複障害の児童・生徒の促進等々。

1年に1回，全体職員会議のなかで，どの教員も出すことのできる諸提案から，教育会議のテーマについて投票で決定されます。選ばれたテーマは作業グループによって準備されます。たいてい，教育会議は1人の報告者によって構成されます（テーマの例：テラピーと授業，運動による学習，学校のコンセプト，ストレスの克服と時間との付き合い方）。

舩尾：お話をお聞きして，実にしっかりした信念をお持ちになって，日々の学校を運営なさっていることが分かります。

校長：ありがとうございます。わたしたちの今日の教育活動は多くの年月をかけて発展してきたものですし，確証されてきたものだと考えております。にもかかわらず「揺れるボートのなかでは，じっと立っている者は倒れる。しかし動いている者は倒れない」という諺は，そのような諺がドイツにはあるのですが，依然として有効だと思っています。わたしたちは「動いている学校」でありたいとも思っているのです。

舩尾：なるほど。まさに「動いている」レーゲンボーゲンシューレの目下のテーマはどのようなものでしょうか。

校長：現在および今後の数年間については次のようなテーマに取り組みます。

① 校舎拡張の計画
② 知的障害者用学校のための学年段階コンセプトの発展
③ 仕事段階コンセプトのいっそうの発展（学校－労働－住居の流れ）
④ 促進学校のための新しい陶冶プランの検討
⑤ ゲプハルト学校における分校の組織と経営の構成
⑥ 言語・コミュニケーション促進

それらのテーマに取り組むための最適な形は作業グループ，全体職員会議および教育会議です。個々のテーマの実施を具体的にどう進めるのかは，全職員のなかで決定されます。

話が前後しますが，過去数年間にわたしたちは次のような発達重点に取り組んできました。

① 促進計画と目標合意
② 学校空間の格調のためのコンセプトの仕上げ
③ 介護士を増員するコンセプトの仕上げ
④ 運動の喜びの促進と発展
⑤ 学校発展プロジェクトのコンセプトの改善

舩尾：学校評価についての実践およびお考えをお聞かせください。

校長：学校の質を検証するための専門的表現としては，最近ますます“Evaluation”という言葉が使用されています。自己評価のいくつかの形については，わたしたちはすでに長きにわたって実践してきています。どの班別活動も半年ごとに総括し，そして簡潔な文書で重要なポイントを列挙します。すべての文書的反省は全職員のなかで交換されます。学校年度の最後の全体職員会議でわたしたちは夏のプロジェクト週を振り返り，そして得られた経験を評価します。

チーム活動のなかで，授業および学習内容の共同の計画・実行・観察・反省において評価の重要要素が応用されています。

評価の重要なステップは保護者や教師へのアンケートです。そのようなアンケートはわたしたちの日々の活動の強みと弱みに意識的に気づき，そして将来の活動にむけての刺激をえるのに役立ちます。

外部評価は始まったばかりです。外部評価とは，「批判的な友」の意味における外部から個人あるいは制度を評価することを意味しています。

舩尾：ブリュックナー先生，今日は本当にありがとうございました。レーゲンボーゲンシューレについてお聞きしてきましたが，最後にドイツに来てからのわたしの体験をもとに若干質問させていだいます。ドイツに来て，不思議な感じを持っています。たとえば誰かに何かを問われたとき，確かに自分の頭のなかにはいろいろなアイデアが浮かびます。しかしそれを上手に表現できないのです。ストレスや欲求不満を感じます。しかしわたしは，パニックは起こしません。しかし知的障害の生徒たちは，ときにパニックを起こします。コミュニケーションが壊れないようにすること，そのことが大切であると思います。そのためにどのような努力をなさっていますか。

校長：わたしたちは子どもの自律をこそ求めています。したがってコミュニケーション能力の向上については最大限配慮しています。特に学校内での子どもと教師の相互行為を重視しています。言葉は不自由であっても，何らかの仕方でコミュニケーションは可能であると思っています。

舩尾：やはりドイツに来てから自分が思っていることを例にして語ります。わたしのドイツ語力では，ドイツ人同士の通常の会話をほとんど聞き取れません。だけどヘッセ先生がわたしに語ってくださることはほぼ聞き取れるのです。すなわちヘッセ先生はわたしの能力に合わせて話す速さや話す内容に工夫をしてくださっているのです。これは特別支援教育です。ヘッセ先生は哲学者であり，養護学校の先生ではありません。でも特別支援教育をなさっているのです。ブリュックナー先生は特別支援教育についてどう思っておられますか？

校長：子どもが一人ひとり違う以上，特別支援教育の考え方はとても大切であると思います。インクルージョン思想が影響力を強めていますが，特に重度の知的障害者の場合には，有効ではないと思います。重い知的障害者のインクルージョンなど想像できません。ちなみに現在コンスタンツでは93名の知的障害者が学校に在籍し，うち43名が一般校にてインクルージョンで学んでいます。そのうち1名のみが重度の障害です。しかしレーゲンボーゲンシューレでは50名が籍をおき，12名が重度です。つまり重度の知的障害者はインクルージョンで教育するのはとても難しいです。

ヒマーライヒホテル

舩尾：知的障害者の就職先について，そして知的障害者を受け入れる企業への公的支援について教えてください。

校長：90%は州の資金支援を受けた特別な施設への就労です。舩尾さんが宿泊されたヒマーライヒホテルはその典型です。

Ⅲ　宮沢賢治とゲーテ

わたし（舩尾）は幸運にも附属特別支援学校の校長を務めることができた（2008-2010年度）。校長らしいことは何もできなかったが，素晴らしい職員のおかげで大過なく任務を終えることができたと自分では思っている。仕事はしなかったが，その間の学びや体験は，わたしにとって間違いなく財産となっている。

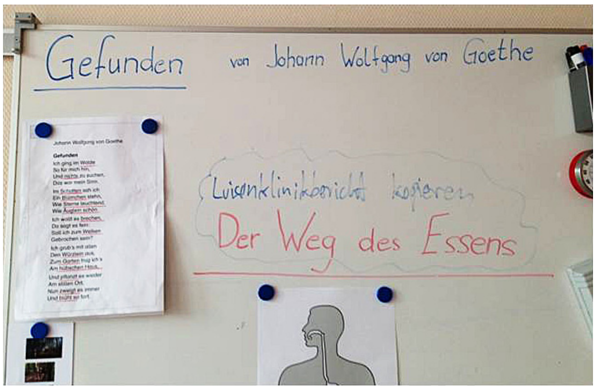
附属特別支援学校の旧職員からお聞きした印象的な話がある。

その先生が小学部の5-6学年のクラスを担当していたとき，（当時はまだ知的障害児のための教育の理論も実践もまだ手探りで行われていた）宮沢賢治の詩「雨にも負けず」を繰り返し朗読させた。たぶんその詩の意味は分からないだろうなと思って。しかしその後成人した教え子から「“雨にも負けず”の心で頑張っている」という話を聞けた。

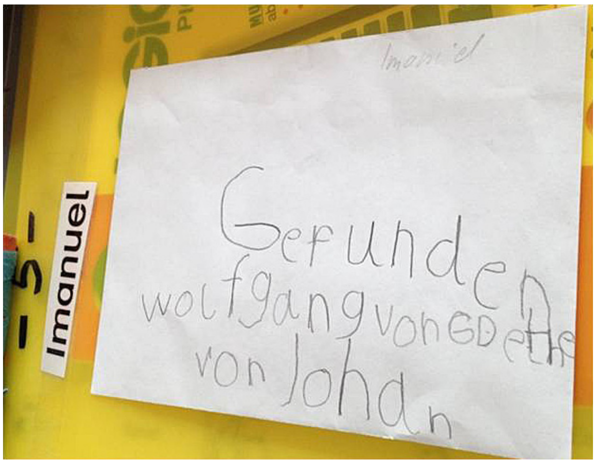
レーゲンボーゲンシューレのある教室に入ったとき，ホワイトボードが目についた。

最初「食べ物の道が」「発見された」と解釈してしまったのだが，実は「食べ物の道」と「発見された」は無関係であった。

「発見された」（Gefunden）はゲーテ（Johann Wolfgang von Goethe）の詩で日本では「一輪の野花」と題されている。



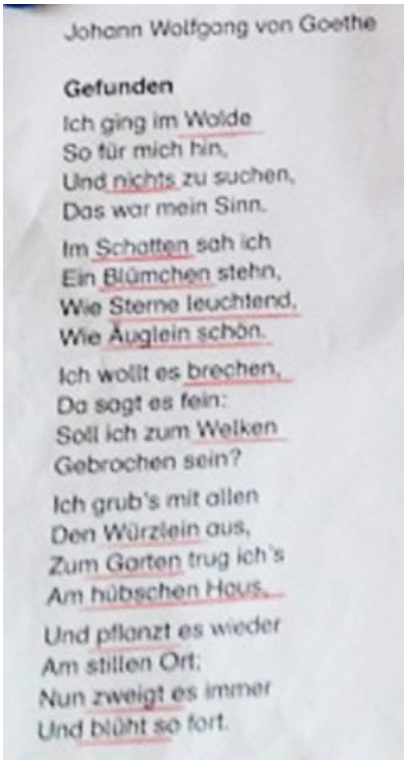
レーゲンボーゲンシューレの子どもが確かにこの詩を学んでいることは，同じくその教室で撮影したイマヌエルという子どもが書いたノートの写真から分かる。



ちなみにその詩は次のような内容である。

- *わたしは森に行った*
- *わたしのために*
- *そして何かを求めてではない。*
- *それはわたしの感覚だった。*
- *物陰にわたしはみた*
- *1本の野花が立っているのを*
- *星のように輝き*
- *瞳のように美しく*
- *わたしはそれを折りたい*
- *しかし，それは弱々しく語る*
- *折られてしおれる運命を*
- *だから，わたしは根こそぎ掘る*
- *それをわたしは庭に運ぶ*
- *すてきな家の*
- *そしてそれを再び植える*
- *静かな場所に*
- *今やそれは枝分かれし続ける*
- *そして咲き続ける*

おそらくこの詩を学んだ子どもは，美を愛でて，命を大切にする人として育つだろうと思う。


Johann Wolfgang von Goethe

Gefunden

Ich ging im Walde
So für mich hin,
Und nichts zu suchen,
Das war mein Sinn.

Im Schatten sah ich
Ein Blümchen stehn,
Wie Sterne leuchtend,
Wie Äuglein schön.

Ich wollt es brechen,
Da sagt es fein:
Soll ich zum Welken
Gebrochen sein?

Ich grub's mit allen
Den Würzlein aus,
Zum Garten trug ich's
Am hübschen Haus.

Und pflanzt es wieder
Am stillen Ort;
Nun zweigt es immer
Und blüht so fort.

(2013年11月18日受理)